イサの氾濫

表題は木村友祐さんの新刊（未来社）である。朝日新聞 4 月 3 日の書評で知り、注文して手に入れた。ざっと読んだが、やはり文芸評論家の斎藤美奈子さんの「朝日書評」が分かりやすいので、それを抜粋して紹介する。

物語は震災後、40 歳にして会社を辞めた将司が故郷の八戸（青森県）に帰るところからはじまる。帰省の目的はイサこと叔父の勇雄について調べることだった。イサは傷害罪の前科をもつ途方もない乱暴者で、一族は迷惑をかけられっぱなしだった。

だが、イサをよく知る老人はいうのである。「今の東北には、あいつみてぇなやづが必要だ」と。「こったらに震災ど原発痛めつけられでよ。（略）そったら被害こうむって、まっと苦しさを訴えだり、なぁしておらんどがこったら思いすんだって暴れでもいいのさ、東北人づのぁ、すぐにそれがでぎねぇのよ」

「東北人は、無言の民せ」と彼はいう。蝦夷征伐で負げで、ヤマトの植民地さなって、米、ムリクリつぐるごどになって、はじめで東北全域が手ぇ結んで戦った戊辰戦争でも負げで、つまり西さ負げつづげで。「ハァ、その重い口ば開いでもいいんでねぇが。叫んでもいいんでねぇが」

あれから 5 年たって、状況は変わっただろうか。震災だけではない。東京の生活に挫折し、故郷にも居場所がない将司は格差社会の犠牲者とも重る。蝦夷の血を受け継いだかのようなイサ。ふと将司は考える。おらが、イサだっ！

小説は東北じゅうの「イサ」たちが結集して永田町になだれ込み、国会議事堂に矢を放つイメージで閉じられる。私たちに必要なのもイサの精神ではないか。何が東京オリンピックだ。何が「がんばれニッポン」だ。冗談こぐでねぇ。んだべ、イサのじちゃん。

本書の「イサのその後、そしてあとがき」から―４か月前の 2013 年 9 月に、東京オリンピックの開催が決定していた。両手を上げて椅子から立ち上がって大喜びする首相と都知事の間抜けヅラを見た瞬間、この国は人の痛みに寄り添わないのだ、という思いが、将司の胸に刻み込まれた。そんな絶望的な気分が抜けない時期に伯父が亡くなった。そのことに、どうしても将司の心はとらわれしまう。あの震災と原発事故で、東京を支えるためにあるかのような東北の、そして地方の隷属的な姿が露呈したはずだった。それをまた、東京でオリンピック。今も生活の再建ができない人たちが何万人もいるというのに、どうすればそんなお祭り騒ぎに関心が向けられるのか、しかもあいつらは、その誘致のために震災の悲惨まで利用した。

（2016 年 5 月 20 日）